

## 伝統行事にみる犬との共生のための感性

### —熊本山鹿市の2つの祭りから—

The KANSEI for coexistence with dog seen in a traditional event

-In the case of two festivals in Kumamoto Yamaga-city

人とペットの共生環境研究所 中塚 圭子

Keiko Nakatsuka, Coexistence environment laboratory of human and pet

キーワード：生命観、犬、祭り、伝統行事、地域空間

Keywords : View of life, dogs, festivals, traditional events, regional space

#### 1. 研究の背景

##### 1.1 日本のペット事情と問題の所在

ペットと暮らす上での問題の所在を明らかにするために、筆者が18年間に渡り神戸市動物管理センターで受けた飼い主からのペット相談の調査を解析したところ、飼い主が問題視する犬の行動は、「吠える」「噛む」「排泄」といった、犬そのものの習性が由来する出来事であった。原因は人社会に犬を溶け込ませるために犬の習性を抑えようとしたための犬のストレスが起因するものや、飼い主、隣人の過剰反応が引き起こしていた。明治以降犬の問題行動解決のために導入された西洋のしつけ方は、動物の習性を尊重せず、行動を人に合わせるべく矯正するものと捉えられてきた。本来、生きとし生けるものに魂を見出す日本の生命観からすると、犬との暮らし方もお互いを尊重する共生であるべきだ。そのため日本人の感覚とのずれが生じている。ペット問題を根本解決するためには、日本の伝統的な動物観を鑑みた共生の方策を見出す必要がある。

##### 1.2 ペットに関する空間の履歴研究の意義

人と犬との関係性を探るためには、当該地域の空間の履歴を探ることが第一の手がかりとなる。空間の履歴とは、当該空間の現在に生き続ける過去の歴史のことである。当該地域の空間の履歴によって、そこに暮らす人々の文化、哲学に影響をもたらすと考えられる。

現代の人と犬との関係性を修復するためには、忘れ去られてしまった、地域の空間の履歴を通して、人犬関係の履歴を思い起こすことが重要だと考えられる。それらの履歴を重ねた上

で、未来へのビジョンが見えてくるからである。

筆者はこれまで、秋田犬っこまつり、兵庫播州地方の犬遍路、山形高島町の犬の宮猫の宮ペット供養祭等、古来よりの伝説伝承をできる限り史実に基づき紐解くことでペットに対する日本的動物観を探り、現代に活かす共生の在り方について調査研究を行ってきた。

日本では、各地に人と愛玩動物との共生の歴史があり、その土地に合った特色を持った、空間の履歴が存在していたに違いない。

熊本の震災支援を通し、山鹿市に「犬子(いんご)ひょうたん祭り」及び「ガランザサ祭り」という2つの犬に纏わる伝統行事が存在することを知った。そこで、本研究では、熊本県山鹿市の空間の履歴と人と犬との関係性を探ることができると推察し、研究に至った。

#### 2. 研究の目的と方法

本研究の目的は熊本県山鹿市の空間の履歴から犬に対する感性を明らかにすることである。

調査地の山鹿市は、熊本県北部に位置する豊かな自然環境の元、豊富な農産物の産地である。また、古代から近代に至る歴史・文化遺産、伝統工芸・芸能が盛んな地域である。

市内の1.5kmしか離れていない地域で、「犬子ひょうたん祭り」と「ガランザサ祭り」という2つの犬に纏わる伝統的な祭りを調査した。

調査期間は2016年6月15日～2018年2月28日である。調査方法としては、文献調査により伝説伝承の元となった史実や現地の空間の履歴を探った。また、その土地に根差した人と犬との感性をさぐるため、文献研究及び聞き取り調査とフィールドワークを行った。如何なる思

いを持って祭りに集うのかについて、「犬子ひょうたん」の紙芝居実施者、「犬子ひょうたん」の作成者、「犬子ひょうたん祭り」と「ガランザサ祭り」に犬連れで来ている人、祭り主催者である神主、獣医師、犬の飼い主を対象とした。

### 3. 結果と考察

#### 3.1 熊本山鹿市の伝統行事「犬子ひょうたん祭り」

「犬子ひょうたん」とは祭りの時期に作られる大きさ3-5 cmほどのしんこ細工を指す(図 1)。



図 1 犬子ひょうたん

「犬子ひょうたん祭り」(正式名称祇園祭)は、熊本県山鹿市山鹿にある八坂神社(大宮神社境内社)で行われる祭りであり、毎年6月15日に行われている。約1万人の人が訪れる。伝承調査では、祇園祭の日は「初かたびら」といい、土地の人はこの日から浴衣を着始める習慣があり、小雨が降ると豊作が約束されるという。祭り会場を少し離れた熊入町、鹿本町民では、この祭りのことを知らない人がいた。まさに「犬子ひょうたん祭り」のある地域に限った祭りであることがわかる。

##### 3.1.1 「犬子ひょうたん祭り」地域の空間の履歴

「犬子ひょうたん祭り」地域の空間の履歴を文献により調査した。

江戸中期、疫病流行を鎮静させるために京都の祇園の神を勧請した。その時、子犬が現れ神

輿に供奉して離れず、また、遷座後子犬が消えるとともに疫病は消滅した。市民は子犬を神の使いと崇め、その姿「犬子ひょうたん」を、疫病除けのお守りとして飾るようになったという。

熊本県は伝染病、主として赤痢、腸チフスの流行については全国有数の地として、ありがたくないことで知られていた。山鹿市の旧鹿本町史では、判明しているだけでも江戸時代より、明治、大正各年代を通じて常に腸チフスの伝染病発症をみている。特に子どもが犠牲になっていた。これらから「犬子ひょうたん」を飾る習慣が継続し、現在に至っていることが分かった。このように、「犬子ひょうたん」を飾る習慣は、病気平癒の人の願いを叶えてくれた犬を、生命擁護の象徴として祈念するという宗教感を持続させたという履歴を見出した。

平成になり、祭時に境内で紙芝居によりこの祭りの謂れを子どもたちに語り継いでいた。犬子ひょうたんの作成者は退役教職員の会、保育園の関係者による学童会、老人会、そして祇園社のある本宮神社であったことを捉えた。犬子ひょうたんは子どもへの生命擁護感性のシンボルと捉えていることが分かった。「犬子ひょうたん祭り」は、まさに子どもたちに関わるもの全体で健康祈願をしたいという生命擁護の感性が習合された空間であると言えよう。

また、子犬に纏わる伝承から、近隣はもとより遠方からも犬連れ参拝する人もいた。さらに、山鹿の山城哲獣医師を中心に、胃腸科の病院に犬連れで訪問活動をし、人を癒す犬の活動も存在した。犬を連れて病院に訪問活動を行うグループの訪問先の病院が胃腸科であることは偶然の産物ではなく、胃腸関係の伝染病に悩んだ人の歴史と、犬が病気の苦しみを癒してくれるという感性が空間の履歴にあった結果とも捉えられ得る。

犬子ひょうたんに象徴される犬は、疫病除けとして犬子ひょうたんの形になり、人に寄り添っている存在として人々に受け入れられていたと言えよう。

##### 3.1.2 「犬子ひょうたん祭り」に見る現代の犬への感性

「犬子ひょうたん祭り」に関わる人々の想いから空間の履歴によって形成された、現代の人と犬との関係性を明らかにした。

「犬子ひょうたん祭り」に携わる人々の中で、1) 祭りの主催者である祇園神社を末社として

持つ大宮神社杉谷博康宮司、2) 犬子ひょうたんを作っている人々、3) 犬子ひょうたんの紙芝居をしているグループ、4) 犬連れで祭りに参加した人、あるいは犬を飼っていて祭りに参加した人々に聞き取り調査をした。

まず、杉谷博康宮司は、神事として粛々と進めたく、町おこしやペット犬のためとして祭りを盛大にすることには意欲的ではないと言う。しかしながらテレビ放送があり、年々知名度が増すにつれて、地元の人以上でも無病息災を犬と共に願いたい人々がやってくるようになったという。そこで、参拝者の心に応えたいと2015年からは神社でもこの日のみペットのためのお守りを授与していると話した。

次に、犬子ひょうたんを配っていた老人会及び退職公務員連盟の児玉徳夫は、自分の子どもの頃は犬子ひょうたんを自宅で作成し、飾っていたが、次第に菓子職人が作って出すようになり、現在は子どもの健康を願って自分たちが作っているという。犬子ひょうたんの逸話にあやかり、子どもたちを見守る意味があると語った。児玉は2006(平成18)年に山鹿市指定文化財台帳98番の「犬子ひょうたん」の作成者であった。

犬子ひょうたんを授け所は保育園関係者らの団体保育会その他でも配られていた。

さらに犬子ひょうたんの紙芝居をしている「ひょうたん会」というグループの清田緑は、紙芝居をして、犬子ひょうたんの意味を子どもたちに伝えていること、昔は伝染病で困っていたがみんなで子どもたちを見守ろうと頑張ったこと、今もこうしてみんなで子どもたちを見守っていることを伝えている、と語った。犬子ひょうたんも最初はお米をお供えし、その後米の粉で作るようになったと語った。

また、調査の結果、祭りの儀式であるお祓いが始まる17:00から21:00までの間にお祓いを受けた犬は10頭であった。飼い主の参加理由としては、①毎年のように家族として、無病息災を願う(6頭)、②老化に伴い体や足の自由が利かなくなり、病氣平癒を願い参加(2頭)③以前から来てみたかったので犬のために参加(2頭)であった。ラブラドル(12歳)を連れて家族4人でやってきたという男性は、足の動きが悪くなった愛犬を連れ、少しでも長く一緒にいられるように祈願したと話した。また、山鹿市で開業している動物病院山城哲院長に聞き取り調査をしたところ、山鹿市山鹿に在住の犬の飼い主は祭りに犬は連れて行かなくても、例年

犬を含めた家族のために「犬子ひょうたん」を求めていることや、祭りに犬を連れて行くときは、人出の多くならない17:00以前に行くことが多いと答えた。

### 3.2「ガランザサ祭り」

「犬子ひょうたん祭り」に続き、同じく山鹿市にある犬に纏わる伝統的な祭りについて調査した。

「ガランザサ」とは、熊本県山鹿市熊入町にある若宮神社境内に生えているクマザサの一種の「オカメザサ」の地元での呼称である。山科一能宮司によれば、以前、境内の鰐口(鈴)がなかった頃、鰐口の代わりに馬の蹄鉄を鈴代わりにしており、その音がガランガランと鳴ったので、ここの笹をガランザサということになったそうである。この笹を家畜に食べさせると病気が治るといふ言い伝えがある。

「ガランザサ祭り」とは、毎年1月6日に家畜の無病息災を願って、山鹿市熊入町の若宮神社で開かれる祭りである。4世紀前半に景行天皇西国巡幸の折愛馬が若宮様の神石により平癒したという伝説がある。また、慶長年間、国主加藤清正公が水利灌漑の治蹟工事を行わせていた山鹿への訪問中に、乗っていた愛馬が病氣になり、清正がこの神社を訪れて境内のガランザサを食べさせたところ、愛馬が回復した。その後、お神酒を注いだ境内の笹を馬に食べさせると病気をしないといわれ、馬の病氣平癒の神社として地元の人々に慕われるようになったということである。

しかしながら、現在の「ガランザサ祭り」の無病息災を祈願する対象は、馬ではなく犬が中心なのである。

山鹿在住のドッグトレーニングインストラクター坪井芳子からの聞き取りによれば、「ガランザサ祭り」は昔から犬猫の無病息災を祈願する祭りとして地元では有名であるという。2018年の祭りでは、30頭~40頭の愛犬、1台の耕運機、3頭のヤギがお祓いに参加した。

#### 3.2.1「ガランザサ祭り」の祈りの対象の変遷

馬の無病息災を祈願する「ガランザサ祭り」が、実際に牛馬の無病息災を願う祭りから現在のペットの無病息災を祈る祭りへと変遷した過程を調査した。農耕馬の使用が少なくなり始めた昭和30年代以降に着目し、文献収集及び聞き取り調査を行った。1955年から2017年までの

62年間に亘る熊本日日新聞の1月7日の記事を総覧し、抽出した「ガランザサ祭り」に関する33件の記事、山鹿市史・町史、山鹿市熊入町若宮神社宮司を兼任している、山鹿市石にある藤崎八幡宮 58代目宮司の山科一能（70歳）、かつて若宮神社の総代を務めていた藤本孝之（89歳）、山鹿市観光協会から拝受した資料等をまとめた。

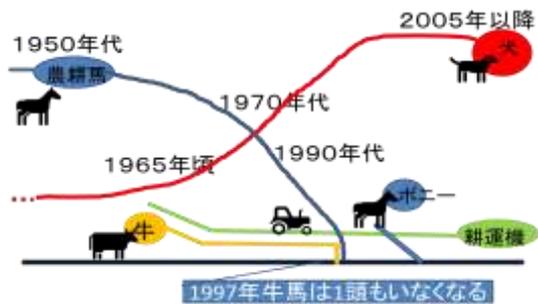


図 2「ガランザサ祭り」の祈りの対象変遷

さらに年代を追って作表したところ、以下のことを詳らかにすることができた。

1950年代、(昭和30年前後)までは、山鹿市熊入町若宮神社は、農耕馬の守り神として、山鹿市はもちろん玉名市、福岡県八女地方など熊本北部に隣接する他県を含め九州北部一円の農家の信仰を集めていた。

また、肉食のための畜産業が発達する中、牛、豚、鶏など、家畜全般の安産祈願、健康を願う形に変わっていった。1961年1月7日の熊本日日新聞によると、畜産ブームに丑年とあって例年の2割増しの8000人の参拝があったという。境内では家畜医薬品の展示会や農機具の実演会もあった。この農機具の実演会は、次に農機具の参拝、お祓いを受けることに繋がっていったと推察される。

1970年(昭和40年代)以降、耕運機の普及し、農耕馬が姿を消していった。宮司はその例として、乳牛を連れてきたところ、牛にストレスがかかって乳が出なくなったということ話を話していた。また、牛舎や鳥小屋に入れて育てられた鶏などは一緒に働いていた農耕馬とは違い、外界の環境に慣れておらずとても神経質に振舞っていたという。

その後次第に動物を連れて来ずに畜産農家の人々のみによる参詣になっていった。1970年には牛馬を連れて参拝する人はほとんどいなくなった。ただ、1973年は丑年にちなみ、牛と馬、

耕運機がお祓いを受けていた。この年が初めて写真によるお祓いを受ける耕運機を捉えていた。

1980年に入り、木材運搬用の馬や愛馬7頭が参拝に訪れたが、次第に数は減り、1997(平成9)年から4年間にかけては、全く牛馬が来ない時代さえあったのが新聞記事から読み取れる。

代わって1965(昭和40)年頃から連れてこられるようになったのがペット犬であった。

山科宮司によれば、最初は外の犬小屋に繋がれていた鎖そのままの近所の犬たちがぼつぼつとお祓いを受けにやってきたそうだ。徐々にペット犬の数は増え始め、1990年ごろからは牛馬やトラクターがいた主役の座をペット犬が奪っていったという。ペットとして飼っている馬の参拝は2004年までは1、2頭がたまに参拝をしていたようだ。

1993年には初めて犬が参拝したことが新聞で取り上げられた。次年の戌年をきっかけに、新聞やテレビの記事内容、画像ともに犬が大きく取り上げられるようになっていったのが見て取れた。熊本日日新聞では1999年の記事に初めてペット犬の参拝を画像でとらえていた。さらに、2006年の戌年以降は、女性が小型犬を連れ、ペットの無病息災や長寿を願って参拝に来るようになり、牛馬の姿は完全に消え、代わりに耕運機などの農耕機器数機にとって替わったことが見て取れた。

### 3.2.2 「ガランザサ祭り」地域の空間の履歴

山鹿と馬との歴史は、弥生時代までさかのぼることができる。山鹿市方保田にある馬見塚古墳をはじめ、多くの古墳を有する山鹿では、馬の埴輪や装飾品、彩色絵画が多く出土されている。山鹿市白宇鬼天神にある馬塚古墳は、馬の病気を治す神として現在に至っても近郷の尊崇が厚く参拝者も多い。

江戸時代になると、1675(延宝3)年には馬の灸点を示す秘伝書が書かれた。山鹿市方保田では、近年まで馬の獣医である伯楽さんと呼ばれ、駄つくれと言う馬にお灸のようなものを施す体調づくりの会を催し、その後みんなで飲み食いをしてきた。さらに馬医の出精に感謝する古文書も存在する。馬の健康を願い、地域のつながりを大切にしていた気風があったと言える。また、仔馬が作畑を荒らすので、前もって村人の寛容を乞う習わしがあった。仔馬ができた飼い主から提供された酒を酌み交わしながら交流することで地域全体で見守っていたことがわかる。

大正時代には、男の子が小学校を卒業して百姓をするようになると、荷馬車を買ってもらったといい、現代の車を買ってもらうようなものであったらしい。また、鉄道のない山鹿では、戦後までバス代わりに馬車が使われていた。馬に水を飲ませ休憩させるために 20 分ほどの停車時間があったというから、馬への気遣いがあったのである。九日町の急坂で馬が事故に遭えば、通称だらだら坂を通る道へと迂回するという記載にも気遣いの様子が伺われる。また、大歳の晩と元日に炊いた米飯は、茶わんいっぱい牛馬に与えていた。年間の労を家畜に感謝し、ねぎらうためであった。

昭和の時代に入り、1957（昭和 32）年には、山鹿市の旧鹿本町分田で水田深耕競技大会が行われ、馬との息の合った耕作の様子が報告されている。昭和 30 年代までは、畑を耕すのに馬を使っていたが、次第に農耕機に代わった。

馬に関する空間の履歴は、馬を飼わなくなるまで習慣が続き、馬との共同作業を通した深いパートナーシップがあったことが分かった。

さらに、人がどのような感性で馬と接し、馬とどのような関係性をもって生活していたのかを探るために、山鹿地方の民家の造りを見てみる。山鹿市を含む熊本の民家の造りは、農家、漁家、商家を通じて、鍵屋（かぎや又はかぎいえ）造りや、二つ屋造りなどがあった。鍵屋造りでは、同じ屋根の下で鍵状に作られた両端に分かれて人と馬とが住んでおり、廊下を通して馬の様子をいつでも見ることができていた。二つ屋造りでは馬屋と人の居住空間は別れてはいるものの、屋根は寄り添うように接しており、やはりすぐに馬の様子がわかるところにある。

「ガランザサ祭り」のある山鹿の空間の履歴をみると、その後、馬の役は耕運機に取って代わられるのだが、機械になっても家族同然と話す持ち主はまさにこのパートナーシップを受け継いでいったと考えられる。畜産産業が盛んになり、牛や豚などの命をありがたく利用し感謝するという感性も受け継がれていった。さらに、農耕のパートナーであった馬や牛が機械化とともに身近にいなくなり、代わりに、ペットをパートナーとして認識していった。

つまり、「ガランザサ祭り」地域では、馬と共に暮らすパートナーとして認識する土壌があり、家畜へ、農耕機へ、そして、犬へと変遷されながら、共生のための感性が醸成される空間であったと言える。

### 3.2.3 「ガランザサ祭り」に見る現代の犬への感性

「ガランザサ祭り」に関わる人々の想いから空間の履歴によって形成された現代の人と犬との関係性を検証した。

2018 年 1 月 6 日の 8:25 から正午までで、犬 39 頭、ヤギ 3 匹、農耕機 1 台、人 100 名近く参加していた。

9:00、「ガランザサ祭り」の祭事が開始され、神事の間、神殿の中に犬が入ることが許されていた。神殿の中には人が 15 名、犬は 10 頭いた。小型犬は飼い主に抱かれ、中型から大型の犬は飼い主の前に伏せて静かに待っていた。すべての犬が神殿での神事が終了するまでの 10 分間、鳴き声は一切なく、動き回る犬もいなかった。「ガランザサ祭り」では、人の振る舞いによって犬が合わせて振舞うことが見て取れた。

次に神殿の外の人や犬を含めて、一同神殿の外に出て並び、祝詞と共にお祓いを受けた。戊年の影響で、「ガランザサ祭り」の珍しさから近郊はもとより福岡、佐賀からも参拝者が訪れていた。

その後、農耕機、ヤギのお祓いがあった。

2018 年のお祓いは犬、ヤギ、耕運機とその持ち主、飼い主が集合した様子を以下のように画像でとらえることが出来た。



図 3 耕運機、ヤギ、犬の参拝

2018 年 1 月 6 日筆者撮影

その後も例年 15:00 頃までは地域住民がお参りに来る。山科宮司はその都度個別にお祓いをし、飼い主は笹とお札を購入していた。

「ガランザサ祭り」の同日、11:00 より、鹿本農業協同組合主催の家畜安全祈願祭が執り行われた。同農畜産部畜産課課長武田義隆は、20 年ぐらい前から家畜安全祈願祭が行われていること、以前家畜を連れてきていたが、九州地方

の家畜伝染病発生以来動物は連れず、人だけで家畜安全祈願祭をすることになったという。

次に、現在の人々の感性を考察してみる。

まず、犬連れ飼い主 22 名にその思いを聞き取り調査した。来場者は、北は福岡市から南は宇城市、東は菊池市、西は玉名市と、熊本県北部の山鹿市周辺から訪れていた。これは、馬連れ参拝の時代と同様であった。馬の参拝していた時期からずっと通いつづけている人もいたが、多くの飼い主は、近年テレビや新聞の報道を見て山鹿市周辺から訪れるようになったことが分かった。今年が成年ということから、今年初めての参加者が一番多かった。画像からは年配の参拝者が多く、犬は小型犬の室内犬がほとんどで、飼い主は犬を家族の一員として認識し、共に暮らす仲間として無病息災を願ったことが分かった。ヤギを連れてきた山鹿市鹿本町の高倉和美は、願い事は元気でいてほしいという「気持ちの問題である」と話した。

今後ネット社会の影響から、さらに拡大しつつあることも推察される。

### 3.3 山鹿の犬に纏わる伝統的な祭りの意義

犬に纏わる 2 つの祭りを調査した結果、犬に関わる空間の履歴が存在し現代に繋がっていたことが分かった。犬の存在を尊重するという意味では一緒だが、二つの祭りに意義には微妙な違いがあった。

まず「犬子ひょうたん祭り」では、人が犬を神の使いとして崇める関係性があった。同時に、神輿に供奉した子犬が力尽きたときに、村人は子犬を手厚く看病し介抱した逸話からは、人とは違う種である「犬」そのものの生命を擁護し慈しむ感性があり、現代にも息づいていた。

他方、「ガランザサ祭り」では、馬から犬へと種が変わるも同じ生活空間で共に生きる関係性があり、動物をあたかも人と同じ種であるがごとく「家族」として受け入れる感性が存在した。

しかもこれら 2 つの感性は山鹿の地に同時に根付いた感性であることが見て取れたのである。

### 4. 結論

- 1) 犬子ひょうたんを飾る習慣は、病氣平癒の願いを叶えた犬を生命擁護の象徴として祈念するという宗教感を持続させた。
- 2) 「ガランザサ祭り」の祈る対象が、1960 年代の馬から 1965 年代の牛などの家畜へ、耕運機へと変遷した。また、1965 年から連

れてこられた犬は、2005 年以降祈りの対象の中心をなしたことを捉えた。

- 3) 「ガランザサ祭り」は、共に暮らすパートナーとして、馬から家畜へ、農耕機へ、そして、犬へと変遷されながら、共生のための感性が醸成される空間であった。
- 4) 山鹿という地方都市に、一方は病氣平癒のため敬われる神の使いとしての犬の存在が、他方は家族の一員として無病息災を祈願する対象である犬の存在が認められた。

本研究で行ったように、空間の履歴を紐解くことで、伝統的民衆知が現在息づいていることが明らかになった。ひいては、地方独自の空間の履歴を活かして地域活性化を行うことが可能であろう。今後の展望として、山鹿の 2 つの祭りがペットを家族の一員として共に生きる喜びを認識する場所として認識され、地域活性化の一助となることを期待している。また、2016 年 4 月に起こった熊本大震災は、被災犬に関する新たな空間の履歴が刻まれた。その熊本に展開されている現代の動物愛護活動に通じる感性についても今後の研究課題となるであろう。

### 引用及び参考文献

- (1) 秋道智彌 (2000) 『日本の環境思想の基層 人文知からの問い』 岩波書店
- (2) 菊鹿町史編集委員会 (1996) 『菊鹿町史 本編 資料編』 菊鹿町
- (3) 木村理郎 戸次由夫 堀 一生 井上欣也 飯田啓詩 大林秀樹 (1994) 『平成 6 年自主研究報告書 犬子ひょうたんを考える山鹿の隠れた風物詩 「祇園祭」の研究』 山鹿新発見グループ私家版
- (4) 『熊本日日新聞』 1955 年-2017 年 1 月 7 日
- (5) 熊本 CAPP 活動ボランティアグループアクロス (2013) 『熊本発 人と動物の絆 アクロス 20 年の軌跡』 熊本 CAPP 活動グループアクロス
- (6) 桑子敏雄 (2009) 『空間の履歴』 東信堂・桑子敏雄 (2013) 生命と風景哲学 『空間の履歴』
- (7) 児玉徳夫 (2006) 『犬子ひょうたん』 熊本市山鹿市指定文化財台帳
- (8) 中塚圭子 (2013) 岡田真美子編 『小さな小さな生きものがたり 日本生命観と神性』 昭和堂
- (9) 平川厚編纂 (1976) 『鹿本町史』 鹿本町役場
- (10) 山鹿市史編纂室 (1985) 『山鹿市史』 上・下巻・別巻